

ゆ

「ほわっ〜」

自分で言うその息もまた、ほんわりとした湯気の白さとおんなじ。
自分の身体から頭からもおんなしに浮かんで闇に消えていく、湯気。
なんだか、周りが寒いようだ。
けれど、湯上がりの自分には、ぜんぜん関係ないみたいで……………。
異世界にいるような、心ここにあらずというような……………。
不思議かな、おもしろいのかな？

「ふーっ」

もいっぺんやってみて、確かめた。
うん、そうだよ。
これはきっと、おもしろい、ほうだよ。
……………そうとわかると、頑張った。
ほかほか湯気たてながら、夜の通りをひとりではわはわ。
きっと湯気も喜んでいる。

「ほえほえ〜」

言ってみてから、ふと周りを見回してしまった。
よかった、やっぱりだーれもない。
口からほえほえと白い息が出て、どこかに解けていく。
やっぱり、寒い寒い、と言って出る息よりも、ほえほえと言って出ていった息のほうが愉しいに違いない。
自分も愉しく愉しく、歩いていこう。
そう思った。

Maki Rouel